

気仙沼市立面瀬小学校

問い合わせ先：0226-22-7800

I 学校の概要

1 児童生徒数、学級数、教職員数

- ・児童生徒数 450名
- ・学級数 17学級
- ・教職員数 25名

2 地域の状況

本市は、豊かな水産資源に恵まれ、日本屈指の漁業基地として「国際水産文化都市」をめざしている。また、本地域は、「森」と「川」と「海」という自然環境がコンパクトに揃っており、「森は海の恋人」のキャッチフレーズでも知られているように、「水」が繋ぐリアス特有の景観を見せる地域でもある。

市では、近年「環境都市条例」や「スローフード都市宣言」等を行い、この豊かな環境と共生したまちづくりとくらし方を志向してきた。さらにRCE（Regional Centres of Expertise on ESD）構想の中に、本市が一昨年6月に仙台広域圏RCEとして指定され、本校は、その持続可能な社会を目指す教育拠点として「学校教育における環境教育の方向性」を探るための一翼を担っている。

このような地域性の中で、本校では、子どもたちが、「環境の世紀」の国際社会を、豊かに、そして、たくましく生き抜くために必要な『感性と知性』を磨くことをめざし、21世紀型の『地球探索型環境教育』の創造に取り組んでいる。



3 環境教育の全体計画

本校では、2002年度から、恵まれた「水辺環境」と「国際性」を生かし、学区の自然環境を学習の場として人間の営みをテーマに環境学習を展開している。そして、この国際的な環境教育の実践を通して、子どもたち

がこれからの国際社会を、豊かに、そして、たくましく生き抜くために必要な『感性と知性』を磨くことをめざし、地域にある素材をもとにした環境学習を基本にしながらも、地球規模で環境を考えることができる児童を育成するために『地球探索型環境教育』の創造に取り組んでいる。

低学年においては生活科で、3年生以上は総合的な学習の時間を使って環境教育を行う。研究のねらいにせまるために、系統性や学年の発達段階に合わせてカリキュラムを作成し、実践していく。

II 研究主題

『子どもの感性と知性を磨く、

地球探索型環境教育の創造』

副主題

～豊かな体験をもとに、児童一人一人の

思考力や表現力を高めるための指導のあり方～

III 研究の概要

1 研究のねらい

水辺環境をテーマに、観察や調査、採集、飼育などの体験を通して、子ども一人一人の自然環境への感性や科学的な探求心を育みながら、他地域との比較などの学習を展開することで、恵まれた自然環境についての理解を促進したり、国際的視野の拡大を図ったりする。

2 校内の研究推進体制

研究を推進していくために、

- ①教科と生活・総合との関連を明確にした指導計画の改善と指導法の工夫
 - ②地域に根ざした探求型学習プログラムの開発及び改善
 - ③専門機関や地域との連携の構築
 - ④ICTの有効活用並びに英語活動の推進
- といった4つの研究の柱を元に、各学年のプロジェクトの見直しや改善を各学年が行うことを基本とする。

さらに各学年の取組を共有化し、深めていくために研究授業を行ったり、話し合いの場として全体研修会を実施する。また研究推進委員会、専門部会なども組織し、効率的に推進する。

3 研究内容

☆プロジェクトテーマ☆『水辺環境と人々の生活』

～地域の水辺環境と人間生活への影響について～

本校では、本地域の恵まれた「水辺環境」を生かし、その中で展開される人間の営みをテーマにした環境学習を展開している。そして、この教育活動の実践を通して、子どもたちが、「環境の世紀」の国際社会を、豊かに、たくましく生き抜くために必要な『感性と知性』を磨くことを目指し、『地球探索型環境教育』の創造に取り組んでいる。

このような特色ある教育活動を創造・実現していくためには、地域と連携し、大学など専門機関の専門知識を積極的に学習や指導に生かし、地球的視野を育みながら、一人一人の個性やニーズに沿った深まりと広がりのある学習を展開していく必要がある。そこで本校では、地域や専門機関等との連携を維持し、さらに発展させながら、プロジェクトを推進している。

**(1)地球探索型環境教育で育む[感性]と[知性]とは
～めざす児童像～**

この実践を通して、次のような「感性」と「知性」を子どもたちに育んでいきたいと考えた。

『感性』

- 自然に興味・関心を持ち、進んで親しもうとする心
- 自然の美しさを発見し、不思議さなどを感じる心
- 自然の豊かさを実感し、その恵みに感謝する心
- 生命の尊さやかけがえのなさを感じ、慈しむ心
- 地域及び地球環境の一員として自覚する心

『知性』

- ◇自然と人間の営みとのつながりに気づく
- ◇身近な生物の生態や多様性、季節の変化等を把握する
- ◇人間も含めた命のつながりや生態系・循環を追求する
- ◇人間が自然環境に与える影響を地球的視野から考える
- ◇自然環境との共生をめざし、考え、行動しようとする

**(2)各学年の「地球探索型環境教育」(国際環境学習)
の実際**

環境学習プログラムを「生活科」「総合的な学習の時間」の核と位置付け、「国際理解教育」や「英語活動」、「情報教育」そして他教科との関連を図りながら、全学年を通じた体系的な学習プログラムを開発・実践し、地域に根ざしながら[地球探索型環境教育]の創造を目指している。

①1年 - 自然と祭り・プロジェクト

『ふれあおう 自然！祭り！』

アサガオを使った草花遊びや七夕や冬至カボチャなど自然とかかわりの深い日本の伝統的な行事・祭りを体験する活動を行った。



また、ALTからハローウィンについて、米国カリスマバーグ小学校の先生から「アメリカの遊び歌」などを教

えてもらい、遊びを通して自然と人間の営みとの関わりについて体験的な活動を行った。これらの活動の際に使う草花や野菜を自分たちで育てることで、自然とより密着した生活を実感した。

②2年 - 野菜栽培・プロジェクト

『つくって つくって つくって たべよう』

学校園で様々な野菜を栽培し、その栽培活動を通してその生長（生命）の不思議さ・神秘さを感じ取るとともに、親子で伝統的な野菜料理や世界の野菜料理をつくったりして「自然の恵みへ感謝する心」を育む活動を展開した。また、ミミズコンポストで野菜くずから土作りに挑戦し、その土で野菜作りに挑戦するなど、栽培を通して自然界の循環に気づく活動を行った。更にミミズよりも小さい土壌生物にも着目し、良い土のひみつを2年生なりに体感し、土壌には様々な生き物が棲んでいることに気づくことができた。



③3年 - BUGS マップ・プロジェクト

『面瀬バグスワールド』

地域を流れる面瀬川や池などをフィールドに、トンボやチョウを中心とする昆虫を調査・飼育・観察し、その種類や分布を調べた。その結果を観察日記やマップなどにまとめながら、生態や多様性、季節変化などを把握し、昆虫にとって住みやすい環境とはどういうものかを五感を使って体験的に探求する学習を展開してきた。この成果を昆虫マップとしてまとめ、保護者等に知らせる学習を展開した。



④4年 - 面瀬サンクチュアリ・プロジェクト

『命を育む面瀬川』

近くを流れる面瀬川に生息するゴリなどの魚を調査し、採集して「面瀬ミニ水族館」をつくり、それを継続飼育しながら観察することによって、これらの魚が生き続けるための条件を、水質や水温、住みか、溶存酸素、餌などの環境条件から追求していく活動を行った。



また、その餌となる水生生物、さらにはプランクトンの世界を観察することを通して、水中の生物同士のつながりに気づき、豊かな水環境を保つために大切な視点を体験的かつ問題解決的に探求した。さらに学習の成果を発表することを計画し、面瀬川の生態系やその豊かさを表現し、それを大切にしようという心を育んだ。

⑤5年 - 海のミュージアム・プロジェクト

『豊かな海～海辺の環境と人々の生活』

面瀬川の河口や地域の海岸に出かけ、干潟や磯の生物観察を通して川の生物と比較しながら、海辺の生物の違いや多様性を実感し、さらに宿泊学習で「沢登り」や「ブナ林の観察」等の活動を行い、「森と川と海のつながり」

について体験を通して気づかせていった。



また、地域の水産業施設を見学したり、ゲストティーチャーから話を聞いたりして「人間と海辺環境との結びつき」の深さを理解することができた。さらにその保全の大切さや持続可能な食についても実感することができた。最終的には、「サイエンスワークショップ」に参加し、今までの体験活動を体系的にまとめ、表現することで、海という視点から人間も含めた生態系や循環についての考えをより一層深めることができた。

⑥6年 - 環境未来都市・プロジェクト

『僕らは地球人！～ウォーターフロント未来都市』

フィールド調査を実施して地域の環境の良さや問題点に着目し、特に水辺環境の現状と自分たちの暮らしとのかわりに気づいた。さらに、省エネルギーの観点から電力会社の協力を得て、電気を生み出す様々な方法や実際に電気を作り出す大変さを実感する授業を取り入れた。また、食材を自分達の地域から全て調達したり、自分達で育てた米や旬の魚や野菜などを昔の方法で調理したりするなど、地産地消の考え方を理解させるために「面瀬一日レストラン」の活動を行った。



これらのことから地球温暖化対策のための様々な方法と「循環型」の生活とを関連させ、自分たちの「大量生産・大量消費」のライフスタイルを見つめ直し、環境と共生した暮らし方について考えを深めていった。また自然環境面だけを優先させるのではなく、人間にとっても

住みやすいまちにするために、「福祉」の観点を取り入れ、ハンディーキャップ体験を行った。その体験を未来都市作りに生かし、自然環境と共生した持続可能な未来と自分たちの生き方を見つめてきた。

（3）グローブの教育課程への位置付け

1・2年生においては生活科、3年生以上については総合的な学習の時間を中心に環境学習を進めるが、必要に応じては理科などの教科学習においてもグローブの活動を教科のねらいに関連づけて学習を進めていく。

例えば、低学年では、栽培学習においてグローブの観測データの中から気温や地温の関係に気づかせたりする。中学年においては気温や地温、水温が昆虫や魚などの生きものの生活に深く関わっていることに気づかせる。高学年においては水質変化と人間の生活とのかかわりについて季節の変化と合わせて結びつきを感じ取らせる。

具体的には、計測したデータを掲示板に掲示し、そのデータを各学年が利用して、共有化を図る。

（4）グローブを活用した教育実践

平成 19 年度において、子供達の観測活動は 3 学期より交代しながら行っている。記録ノートを準備し、計測したデータを記録するだけでなく、観測した児童の気づきや感想なども記入し、活動に生かせるように工夫している。平成 20 年度は、各学年のプログラムと関連させて、グローブを活用した授業実践を行っていききたい。

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

- 児童が定期的に計測活動を行うことで、計測で得られたデータと季節との関連や温暖化など環境問題とのかかわりに気づき始めている。
- 気温と水温、気温と地温とのかかわりなど、関連づけて考える姿が見られてきた。
- グローブの活動について、実技研修等の職員研修を行ったりしたことで、グローブの目的を理解し、観測データを共有して、各学年のプロジェクトに関連づけようとする意識がもてるようになった。

2 研究の課題

- 本地域における事象が世界ともつながっていることを児童に気づかせるとともに、世界とのつながりを意識しながら活動に取り組みせていくための指導のあり方等について、積極的に外部講師を招き職員研修などを行っていききたい。
- 児童が計測に使用する様々な機材について、今年度は本校にあるものを利用したが、測定結果の精度を高められるよう、来年度はより良い機材を予算化して使用していききたい。

V 研究第 2 年次の活動計画

- ・グローブ推進委員会を設置し、プログラムとの関連を積極的に図ったり、予算等の執行に際し、作業を分担して効率化を図ったりする。
- ・各学年毎に発表会を設定し、保護者や地域の方に 1 年間の成果を発表し、啓蒙する。
- ・HP に学習活動や活動の結果（データ）を掲示する。
- ・環境教育に関する HP や掲示板を利用し、広く国内外との小学校との交流を図る。